

ひろしま郷土資料館だより

NO.109

企画展 実は広島3 日用品編

会期：令和6年12月7日(土)～2月24日(月・振休)

全国的に知られている企業や全国シェアを占める製品の中には、広島が発祥であるものがありますが、そのことが意外と知られていないのではないかと、改めて広島のモノづくりを見直そうという目的で令和4年度から始まった「実は広島」の企画展示です。今回、3回目は日用品編ということで、普段私たちの生活の身近にある広島製品を取り上げました。テーマを3つに分け、それぞれ近代に入ってから現在までの時代背景と、それに合わせて変化してきたものづくりが製品でわかるよう資料で紹介しました。

最初は、「快適な生活を求めて」というコーナーで日常使用する筆記用具のコーナーを設けました。近世までは、もっぱら筆記用具としては毛筆が使用され、広島県内には現在でも伝統的工艺品に指定された、全国的にも有名な筆の産地が熊野町、川尻町と2か所あります。広島城下でも筆づくりは行われ、その後も市内で作られていたようですが、残念ながら原爆投下後は復活しなかったようです。今回は熊野筆を紹介しました。



明治時代の筆・墨・硯卸商

『広島諸商仕入買物案内記』(明治16年発行)より

熊野町でいつ頃、筆づくりを始めたのかについては、残された資料などから大体、江戸時代後期に始まったようです。熊野筆が大きく発展し、生産を伸ばし、全国的にも筆の産地として知られるようになったのは明治、大正期です。1872年、政府が「学制」を發布、学校制度が始まり、子どもたちが初等教育として「手習い」を学ぶようになったことが大きく影響しています。



手習いの教科書

展示では、明治初期の文書や手習いの教科書、大正期に技術向上に尽力した地元有志の会、当時の皇太子(後の昭和天皇)に献上された旨の文書など筆づくりが盛んになる時期の資料を紹介するとともに、戦後生産が伸びる化粧筆や多様な用途に対応する各種の刷毛、伝統工芸士さんによってつくられ、明治神宮に献納された毛筆、変わったところでは動物の抜け毛から作られた筆や、ストラップ、カプセルに入る小筆等、筆づくりの技術が多様な用途に応用されていることも具体的に紹介しました。

熊野筆の産地としての特徴は、大量生産に対応できたことです。集落の製造問屋が中心となって、分業体

目次

- P 1-3 企画展「実は広島3 日用品編」
- P 3-5 企画展「図面で見える宇品陸軍糧秣支廠」
- P 5-6 企画展「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」
- P 6 パネル展示「見て！学んで！楽しむ！海図の世界」

- P 7 スペシャルイベント「クイズでたんけん！郷土資料館」
- P 7-8 活動報告(令和6年10月～令和7年3月)
- P 9-10 令和7年度企画展紹介



展示の様子 筆記用具コーナー

制が集落内でうまくまわったこと、特に農閑期などに行う賃仕事として家庭内で女性が多くの担い手となったこともあげられます。

戦後の一時期、教育課程の変更で生産が激減したこともありましたが、その後に復活、さらに生産がさかんになっていきました。また生活様式の変化で、筆づくりの技術は、化粧筆、色々な用途の刷毛、など多様化して活かされていきます。現在、芸術的分野でもパフォーマンス等を通じて、目にすることが多くなっています。熊野町としても、筆まつりや絵手紙展など、筆文化の振興に力を入れていることを紹介しました。

筆記用具の2つ目として、近代外国から輸入された「万年筆」を取り上げました。日本で最初に万年筆を輸入したのは、現在でも書籍、文具の店としても有名な丸善だと言われています。国内の三大メーカーの中でも、最も老舗なのが、呉市天応町に本工場があるセーラー万年筆株式会社です。

明治期には、全国、県内でも万年筆を制作する会社は多くあったようですが、材料を輸入に頼ったり部分的に製造する会社が多く、ペン先から軸まで一貫して製造し、それを大量生産したのはセーラー株式会社をはじめです。万年筆は大きく型が変わることはありませんが、時代に合わせて、例えば昭和30年代、サラリーマンのポケットに入る小型のミニ、50年代、ファッション性の高いキャンディなど時代により変遷があります。昨年のG7広島サミットで各国首脳に渡された記念の万年筆も紹介しました。今や日常生活に欠かせないボールペンや筆ペンを最初に製造したのもセーラーです。万年筆やインクも熊野筆同様、現在では用途により、種類は多様化しています。今後も万年筆の繊細なペン先にこだわって製造を続ける、他にはあまり例のない地元広島技術を見ていただきました。

2つ目のコーナーは、「安全な生活を求めて」というテーマで、衛生用品を取り上げました。現在日本では、



展示の様子 衛生用品コーナー

衛生環境が死に直結するようなことは少なくなっていますが、2020年、コロナウイルスの世界的流行があり、近年のグローバル化で海外からの新たな病気も国内に入りやすい環境にあります。幕末の開国後、コレラが全国的に流行して多くの死者をだしたことは有名ですが、今よりもずっと衛生環境が整わなかった時代、赤痢、腸チフス等、病気に脅かされてきたのは広島も例外ではありません。病気をなくすための衛生環境の整備に貢献した祇園（現安佐南区）発祥のフマキラー株式会社を紹介しました。もともとは大下回春堂という薬種商から始まり、蚊やハエの駆除を中心に、大正期、除虫菊を主成分とした「強力フマキラー液」を開発し、

その後も一貫して衛生用品を製造してきた会社です。戦後、環境が悪化した時期に大量に製造された消毒薬品、昭和30年代の高度経済成長期のゴミ問題に対応した製品、気密性の高い住宅で目立ったゴキブリ対策用品、火を使用しないマット式の蚊取り等、時代や生活様式の変化に合わせて製造された商品を紹介しました。変わったところでは、普段あまり目にすることがない外国の工場生産されたものを展示しました。東南アジアやヨーロッパ製品もあり、地域や場所が変わっても人間の生活や苦勞に変わりはないことがわかります。

期間中、フマキラー株式会社の展示資料は、人に無害な「強力フマキラー液」、世界初のマット式蚊取り「ペープマット」等が「化学遺産」に認定されました。

最後は「健康的な生活を求めて」というテーマで、スポーツ用品を紹介しました。もともとはゴム産業からスタートして、現在ではボールの製造が世界的になった技術です。

広島市でゴム産業といえば、株式会社ミカサ、株式会社モルテン、西川ゴム工業株式会社が有名ですが、3つの会社とも横川地区を発祥としています。今回は、なぜ横川地区でゴム産業が発展していったのかと、同地区で発展した広島針との関連を考えました。創業者の出身地、地理的・経済的な要因等、色々な事柄が考えられましたが、今回のミカサ、モルテンの2社では針との関連を示す直接的な資料はありませんでした。西川ゴム工業は、もともと製針工場のゴム部門が独立したという経緯が、針との関連を示す興味深いケースでした。

資料では、現在世界の公式試合に使用されているバレーボール、バスケットボール、サッカーボール等を紹介しました。ボールの基本的な製造方法や種類、製品を見ることで技術の改良、向上が理解できるような展示を行うことを心がけました。またボールが有名になりましたが、3社とも軸受けや、福祉用品を製造し、産業、福祉分野でも重要な役割を果たしていることも紹介しました。

広島県人は、フロンティア精神、チャレンジ精神が旺盛と言われます。新しいものを取り入れて発展させる創意工夫、伝統技術を伝承する熱意と努力、また、ものづくりに対してもつ「こだわり」や「辛抱強さ」が、高い技術力を培い、それらが現在に至る広島のものづくりを支えています。伝統技術を守っていく重要性とともに、たくましい広島のものづくり精神を伝えられたら良かったと思います。（沖田久美子）

会期中の来館者数：2,297人



展示の様子 ゴム産業コーナー

企画展 図面で見える宇品陸軍糧秣支廠

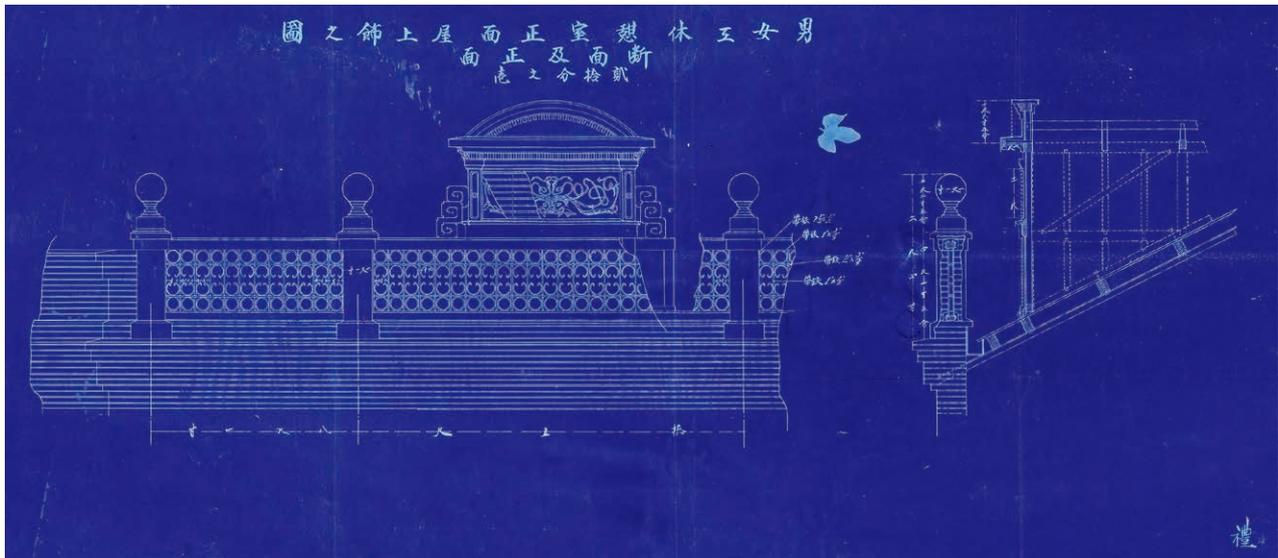
会期：令和7年3月8日（土）～5月6日（火・振休）

当館は、本年令和7年（2025）5月に開館40年目を迎えます。その前身は旧宇品陸軍糧秣支廠の缶詰工場でしたが、建物が郷土資料館として整備活用されるにあたっては不明な点も多く、いくつかの箇所は推定復元されました。その後、宇品陸軍糧秣支廠関係者からの情報提供や当館学芸員の研究によって判明したこともあります。その実相については現在でも分からないことが多いのです。

その中で、令和4年（2022）当館に寄贈された一群の図面類により、新たな情報が得られることとなりました。本展では、宇品陸軍糧秣支廠のかつての姿を、缶詰工場・事務所棟といった建物や設備をはじめ、使用されていた道具、什器類など多岐にわたる図面類から垣間見ようとしたものです。



展示の様子



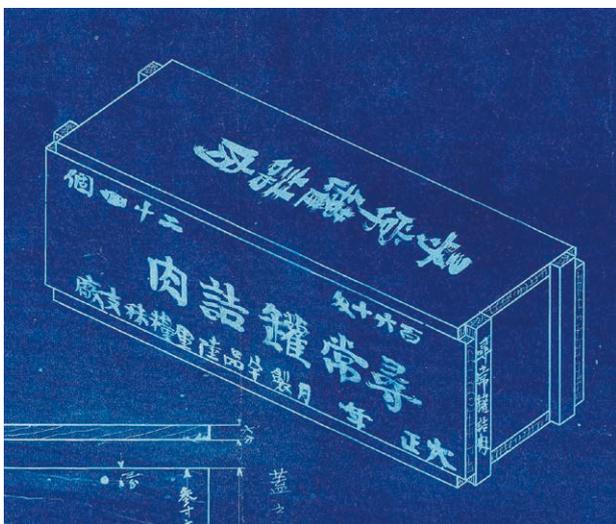
男女工休憩室正面屋上之飾之図

図面群は、広島市南区在住の寄贈者宅の倉庫にひとまとまりになっていたものですが、なぜそこにあったのか、どういう関係があったのかは全く分からないとのことでした。主には「青図」と呼ばれる図面が、「青焼」や「トレース図」も含め約80種類の図面を中心に、宇品支廠宛の履歴書や、外郭団体糧友会のポスター、糧秣廠の秘密文書なども含まれています。これらの図面を基本的には区画ごとに配置し、今まで昭和時代の宇品支廠について知られていた図や写真と比較しながら紹介していきました。



展示の様子 床張りした図面

まず、宇品支廠全体の配置を床張りにした図面で見ただき、大きく北から屠殺場（食肉処理場）、缶詰工場、搗精工場と長細い敷地に配置されている様子を確認いただきました。続いて、屠殺場区画では、連れてこられた生牛が繋留され、測量・検査を行った後枝肉になるまでのプロセスに関わる建物や、汚物集会枱や検査台などの図面なども展示しました。また、枝肉の副生物の内臓類が「富国煮」の缶詰になり糧友会広島支部が販売したことも、その仕様書の断片や雑誌『糧友』の広告から紹介してみました。



尋常罐詰肉容器（部分）

缶詰工場区画については、昭和58年まで建物の多くが残っていたこともあり、当時の調査報告に倣って東西南北各棟とこれらの建物に囲まれた中央棟、のちに廠舎と呼ばれる事務所棟などを紹介しました。南側正面のデザインは缶詰工場には大変美しく、郷土資料館として整備した際に不明だった装飾も非常に凝っていたことが図面からわかりました。ここは当時男女工員の休憩室だったところで、東棟・西棟の一部とともに現在残されています。一方、北棟や中央棟、浴室便所棟、瓦斯発生室、基台より上の煙突などは取り壊されて現在は宇品西公園となっており、かつての様子が浮かび上がってくる図面はまた貴重なものとなっています。建物だけでなく、「尋常缶詰肉容器之図」に記された「大正」の文字は、図面群の多くがこの時

代に描かれたものと推測できる糸口となりました。

精米・精麦を行っていた搗精工場区画については、先の2つの区画ほどは図面は多くなく、若干新しそうです。昭和5年に佐竹式の胚芽精米機が導入されていますが、胚芽米や麦の兵食への採用で当時陸軍の懸案事項だった脚気への対策がうかがえます。現在住宅やスーパーマーケットになっている搗精工場区画からは、平成20年の工事の際当時のトロコ軌道が確認されており、見つかったレールの一部も併せて展示しました。

その他、コラムを4点設けましたが、昭和18年の図面と糧秣廠の秘密文書では「ケップ製造」について紹介しました。「ケップ」とは見当もつかなかったのですが、文書を読むうちに見えてきたのは、食肉処理で発生する牛などの血液を確保して糧秣廠ならではの技術を用い「血粉」に加工、それを塗料用に製造しようとしていたことでした。戦局悪化の時期のエピソードです。

現段階ではこれらの図面に関してはまだ不明な点が多くさらなる検討が必要なのですが、宇品陸軍糧秣支廠の姿をこれまで以上に浮かび上がらせるきっかけにできたのではないかと思います。（前野やよい）



展示の様子 尋常缶詰肉容器之図ほか

企画展 「ごんぎつね」が語る昔の暮らし

会期：令和6年9月7日(土)～11月24日(日)

秋の恒例展示となっている企画展「『ごんぎつね』が語る昔の暮らし」。今年度も無事に終了しました。

この展示は、平成13年度から当館の恒例展示として開催しており、元は小学校4年生の国語科で学習する童話『ごんぎつね』のストーリーに沿って、社会科の学習単元「昔の暮らしの道具と人々の暮らしの様子」で学ぶ昔の生活道具を紹介するものでした。（現在は、「昔の暮らしの道具と人々の暮らしの様子」は小学校3年生で学習します。）

展示は、物語の舞台でもある江戸時代終わり頃の農村での暮らしに使用されていた生活道具を中心に、登場人物の兵十が魚獲りに使っていた「はりきり網」や「魚籠（びく）」、行商で使われる「皿ばかり」や「大八車」、物語の最後に出てくる「火縄銃」などの実物の道具によって物語の世界をより身近に感じることができる内容となっています。また、昔の道具と現在の生活用具との違いや昔の人々の暮らし方など、道具を通して様々な発見をしていただける場となることを目的としています。

明治時代以降に電気が普及し、その後も様々な技術が発達して人々の生活様式が大きく変化していききましたが、それまでの長い間、人々は様々な工夫をして、モノ



展示の様子 火の利用(囲炉裏)



展示の様子 わら細工



配布した「しおり」

を大事にしながら暮らしていました。例えば電気が普及するまでは、火を調理・暖房・照明などに利用していました。また、稲作で作る稲も、お米を収穫した後は、藁をなつて筵（ムシロ）や草履、籠などの道具を作ったり、家畜の飼料にしたりするなど、捨てるどころ無く上手に利用していました。

現在の暮らしはとても便利にはなっていますが、毎年この時期になると展示を見ながら先人の知恵や工夫に改めて感嘆させられます。

会期中は、小学生向けにクイズ形式のワークシートを作成し、土日の来場者に自由に利用してもらえるよう設置し、親子連れ来場者を中心に利用していただけました。ワークシートの利用により、更にしっかりと解説パネルに目を通してもらえたようです。また、ワークシートの参加賞としてプレゼントした「しおり」も好評でした。

今後も、学校等の学習の一助及び来場される方の新たな発見の場となるような工夫をしていければと思います。（寺田香織）

会期中の来館者数：4,202名

パネル展示 見て！学んで！楽しむ！海図の世界

会期：令和6年9月7日(土)～11月24日(日)



展示を見る来館者

第六管区海上保安本部海洋情報部との共催で「見て！学んで！楽しむ！海図の世界」というタイトルで明治時代から戦後までの広島湾岸を中心とした海図展示を行いました。今回で6回目の開催となります。

広島市郷土資料館は郷土広島の歴史（伝統的地場産業、昔の暮らしなど）に関する展示をしていますが、宇品に立地しているので宇品港（広島港）に関わることも重要なテーマとなります。今回も明治から現代までの海図などを集め、広島湾に関する歴史資料を展示して、海から見た広島の変化についてよく分かる興味深い展示となりました。

また、子どもたちにも海図の世界を楽しんでもらえるように、3Dメガネをかけると日本近海の海の底が立体的に見える海図の展示も行いました。子どもたちにも大人気でした。海図や広島の海のことを知って興味をもってもらおう入口になればと思います。

第六管区海上保安本部海洋情報部との共催展示が昨年までで5年連続となったのを機に、水路記念日の9月12日に第六管区海上保安本部長から感謝状をいただきました。（河村直明）

会期中の来館者数：4,202名



第六管区海上保安本部長からいただいた感謝状

スペシャルイベント「クイズでたんけん！郷土資料館」

開催日：令和6年11月3日

文化の日にスペシャルイベント「クイズでたんけん！郷土資料館」を行いました。

館内の展示資料から出題された10問のクイズを、展示を見ながら回答していきます。問題が館内のどこにあるのか探すのも大変です。ご家族同士や友達同士、87名の方にご参加いただきました。今年は参加賞として色々な種類のグッズをご用意しましたので、子どもたちはクイズよりもどれを選ぶか悩んでいたようです。

あわせて昨年も大好評だった駄菓子作りコーナーを開設し、広島のお好み焼きのもとになった「一銭洋食」と「あったかわらび餅」をご自分で作って試食していただきました。

同時開催中のパネル展示「見て！学んで！楽しむ！海図の世界」のコーナーでは、第六管区海上保安本部の職員による解説や海図にちなんだ工作を行いました。

小さなお子さんから大人の方まで楽しんでいただきました。（河村直明）

クイズ参加者数：87名 一銭洋食・わらび餅作り参加者数：各128名 当日の来館者数：140名



クイズに取り組む来館者



海保職員による子どもたちへの工作指導

活動報告

令和6年10月～令和7年3月

教室事業

実施日	事業名	参加者
10月20日(日)	教室「山繭でブレスレット作り」	15名
10月26日(土)	教室「手すきハガキ作り」	16名
11月17日(日)	教室「けん玉教室」	20名
11月23日(土)	教室「絵手紙で年賀状作り」	12名
12月14日(土)	親子教室「羽子板作り」	5組14名
12月21日(土)	教室「バウムクーヘン作り」	20名
1月25日(土)	教室「糸つむぎ体験」	19名
2月15日(土)	教室「七輪を使ってみたらし団子作り」	24名
2月22日(土)	大人向け教室「大人の染色体験」	18名
3月15日(土)	大人向け教室「まち針ストリングアート作り」	14名

文化の日スペシャルイベント

実施日	事業名	参加者
11月3日(日)	クイズラリー「クイズでたんけん！昭和のくらし」 「一銭洋食とあったかわらびもち作り」 ほか	343名

ひろしま郷土史講座

実施日	事業名	参加者
1月18日(日)	第1講「広島モノづくり産業の歴史」 ＜広島モノづくりはこうして発展した！＞	45名
2月8日(土)	第2講「熊野筆のはじまり」 ＜熊野の筆は、なぜナンバー1になったのか？＞	36名
3月11日(火)	社会見学「熊平製作所ショールーム見学」	19名

その他の事業(館外事業)

実施日	事業名	主催等	参加者
10月17日(木)	講義「ひろしま未来学 宇品港 ー築港から終戦までー」	広島市立みらい創生高等学校	17名
10月19日(土)	講演「中四国地方の日本100名城 ～この城ではこれを見よ！」	公益財団法人広島市文化財団 三入公民館	28名
10月19日(土)	講演「宇品陸軍糧秣支廠・広島陸軍被服支廠・ 広島陸軍兵器支廠の役割」	マリン・アシスタント広島	20名
10月25日(金)	講演「近世都市広島の成立と発展」	公益社団法人広島県不動産鑑定士協会・ 中国不動産鑑定士協会連合会	185名
10月27日(日)	工作「ミツバチからくり人形作り」	秋のグリーンフェア2024実行委員会	140名
11月10日(日)	解説「親子名城見学会」	公益財団法人広島市文化財団 真亀公民館	24名
11月21日(木)	授業「文明開化の時代の広島」	まちなか西国街道推進協議会・ 広島市立袋町小学校	43名
12月13日(金)	講演「西国街道勉強会」	広島市 中区市民部地域起こし推進課	55名
12月15日(日)	講演「浅野期の芸州藩とやす」	公益財団法人広島市文化財団 安公民館	55名
1月6日(月)	講義「博物館資料論」	広島市立大学	18名
1月10日(金)	授業「文明開化の時代の広島」	まちなか西国街道推進協議会・ 広島市立千田小学校	94名
1月15日(水)	授業「われら、比治山探検隊！」	広島市立段原小学校	15名
2月2日(日)	講座「島だった比治山・黄金山の今昔」	公益財団法人広島市文化財団 南区図書館	40名
2月6日(木)	授業「文明開化の時代の広島」	まちなか西国街道推進協議会・ 広島市立幟町小学校	86名
2月9日(日)	講座「実は広島・実は南区・実は宇品」	公益財団法人広島市文化財団 宇品公民館	34名
2月20日(木)	講座「日本100名城で探る城めぐりの魅力」	公益財団法人広島市文化財団 馬木公民館	26名
3月12日(水)	講座「太田川の川船」	公益財団法人広島市文化財団 古市公民館	48名
3月29日(土)	講座「西国街道の歴史」	広島仏だん通り活性化委員会・ 徳栄寺	17名

令和7年度(2025) 企画展紹介

郷土資料館・ヌマジ交通ミュージアム連携企画展

「広島駅のいまむかし 路面電車が乗り入れた」

会期：令和7年5月17日(土)～7月6日(日)

明治27年に開業した広島駅は広島市の発展とともに重要性や規模を拡大していき、現在、新駅ビル開業により新たな姿を見せつつあります。当企画展では、そうした過去からの広島駅の歩みを紹介した上で、現在の広島駅の機能や街づくりの視点から見た位置、路面電車の2階乗り入れをはじめとする技術などを紹介します。



広島駅絵葉書(個人蔵)

企画展「夏休み おばけの博物館」

会期：令和7年7月19日(土)～8月24日(日)

夏に話題となる「おばけ(妖怪や化け物)の世界」を紹介するとともに、おばけを生み出した昔の人々の暮らしや思いも紹介します。昔の「お化け屋敷」の疑似体験もできます。



おばけ(妖怪)大集合

企画展「『ごんぎつね』が語る昔の暮らし」

会期：令和7年9月6日(土)～11月24日(月・振休)

新美南吉の童話『ごんぎつね』のストーリーをまじえながら、童話に登場する昔の道具や人々の暮らしを紹介します。



ごんぎつねと昔の道具

令和7年度(2025) 企画展紹介

被爆80周年記念事業・企画展

「タイムトラベルくらし 80年～くらべて実感、わたしたちのくらし」

会期：令和7年12月6日(土)～令和8年2月23日(月・祝)

戦後80年たった広島を生きるわたしたちが昭和のくらしをのぞいたら、きっとびっくりするようなくらしの変化が見えてくるに違いありません。逆に戦中戦後をくらしただけの人たちからすれば令和のくらしは想像もつかないものでしょう。戦前戦中戦後・高度経済成長期・昭和後期～平成・現在のそれぞれの時代のくらしを、様々な生活道具等からたどりながら、平和の尊さを再認識します。



変化したくらしの道具

企画展

「写真で見る宇品陸軍糧秣支廠」

会期：令和8年3月7日(土)～5月6日(水・振休)

当館の前身である旧宇品陸軍糧秣支廠について、その役割やあゆみを、当館蔵の写真や道具類を通して紹介します。



宇品陸軍糧秣支廠缶詰工場 箱詰め作業

状況により、展示会期・事業等の変更または中止の可能性があります。
あらかじめご了承ください。最新の情報は当館ホームページ等でご確認ください。



▲ HP



▲ Facebook



▲ Instagram



▲ X



▲ LINE

ひろしま郷土資料館だより No.109

令和7年(2025)3月30日発行

編集・発行 (公財)広島市文化財団 広島市郷土資料館
〒734-0015 広島県広島市南区宇品御幸二丁目6-20
TEL (082) 253-6771 FAX (082) 253-6772
URL <http://www.cf.city.hiroshima.jp/kyodo/>



広島市郷土資料館

HIROSHIMA CITY MUSEUM OF HISTORY AND TRADITIONAL CRAFTS